

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 逆井 聡人

逆井聡人氏の博士号学位請求論文『ナショナル・ランドスケープ焼跡と闇市 ― 国民的地景と占領期の空間表象』の公開審査は、5月9日（月曜日）17時より行われた。審査員は、言語情報科学専攻から小森陽一教授、武田将明准教授、主査エリス俊子の3名、加えて藤井貞和本学名誉教授、十重田裕一早稲田大学教授の2名が審査にあたった。

逆井氏の論文は、戦後日本をめぐる言説構成において特権的な意味を付与された「焼跡」という概念を「闇市」と対置させ、「焼跡」が国民的地景(National Landscape)として敗戦後の新生日本を象徴する記号として流通したのに対して、「闇市」の存在がこれを解体し、「焼跡」の空間イメージに亀裂を入れる記号として機能していたことを、文学作品及び同時代の批評言説を通して考察するものである。「焼跡」「闇市」という二つの空間イメージが概念化されていく過程をたどり、その歴史的、文化史的な意味を丹念に検証し直すことによって、日本の「戦後」なるものが一国史的な歴史認識のもとでは語り得ず、それが冷戦期に向かう占領期政策と密接にかかわりながら国家的な枠組みを超えたところで、相対立する力のせめぎあいの中で体现されたものであることを明らかにした。敗戦後日本の状況をナショナルなものとして囲い込もうとする言説を切り崩すものとして、とりわけ在日朝鮮人の存在とその文学に着目し、敗戦後日本の文化史を新たな視座から捉え直す逆井氏の議論には一定の説得力がある。同じく「焼跡」「闇市」の表象を取り込んだ石川淳、田村泰次郎、宮本百合子などの同時期の日本人による文学テキストをも分析の対象とし、占領期日本の相克する言説の状況を複眼的に捉えた本論文は、朝鮮半島や中国大陸の旧植民地、そしてアメリカによる占領政策との関連において日本の戦後史をより大きな枠組みの中で捉え直す試みとして、その意義を高く評価された。

博士論文として十分に厚みのある内容を含むものであることを踏まえた上で、質疑応答に際しては、いくつかの疑問点、あるいは議論が煮詰められていない点についての指摘があった。例えば、冷戦期構造が準備されていった時期を扱っているにもかかわらず、これが朝鮮半島分断に至る政治的な状況に及んだところまで議論しきれておらず、コンテキストの提示の仕方が限定的であるため、戦後日本に対する読者の認識そのものを根本的に転換するところまで至っていないこと、それぞれのテキスト分析には独自性があるものの、そこで提示されている問題点が全体の文脈に有機的に結びついていない点が残ること、またテキストの選択の根拠についての説

明が不足しているため、論証の仕方がやや強引な印象を与えることなどである。空間表象に焦点を当てたために時間軸が見えにくくなっている、ジェンダー論的な視座からの分析が徹底されていないといった指摘もあり、また文体のトーンのばらつきに注意して表現上の工夫をすると、論文としての仕上がりにさらに統一感が出てくるだろうとの助言もあった。

このような助言や改良の余地のある点については今後の研究にいかしていくことが求められるが、いずれも本論文の意義を揺るがすものではなく、逆井氏の展開する議論が博士論文としての幅と厚みを有し、論考に十分な独自性があり、また体裁の面でも博士論文として基本的な手続きを踏まえていることが確認された。以上により、逆井聡人氏の本論文は、博士（学術）の学位を授与するに値するものと、審査員全員一致で合意に達した。

以上